



河川を再生する取組みとは、 どのようなことですか？

急速に都市化が進んだまちでは、ふだんは水の流れがなく、川があることすら忘れられているような川がまだまだ多くあります。しかし、ひとたび強い雨が降ると、水かさが急に増え、あふれて周囲の家屋などに被害をもたらすところもあり、住む人にとってはきわめてやっかいな存在です。また、川自体も無味乾燥なコンクリートで固められ、生き物のすみにくい場所となっているうえ、周辺には建物がぎっしりと建ち並び、風情のない景色となっています。川岸に立つ「川をきれいに」の看板がとてもむなしく見えます。どうしてこんな姿になってしまったのでしょうか。

都市化の進む前の周辺の姿といえば、そのほとんどが水田や畑で、昔から集落の人々が協力して、農耕のために必要な灌漑水路の整備や維持にあたってきました。河岸はコンクリートなどの材料が使われていたわけではなく、草や木で覆われた土か、せいぜい石積み程度であったため、四季折々の変化が感じられる「ふるさとの小川」としてのどかな景色をかもし出していました。そのうえ、ところによっては、高瀬舟が通るなど、地域の財産として人々が大切に支えてきた川もありました。

このような水路の周辺が急激に都市化していくと、まずは家々から出される雑排水が流れ込み、汚れはじめました。近年では下水道が整備されてきたため、極端に汚れた川は減りましたが、下水道で処理された水は、海や下流の大河川に放流されることが多いので、整備が進むことにより小川に流れ出る水量が減り、川の流れがどんどん少なくなりました。このようにして、流れのない、景色の悪いドブ川が残るようになりました。

川のまわりに水田や畑、森林などが広がっていた頃は、雨が降ってもそ



の多くが水田にたまったり、土にしみ込んだりして、しばらく川に流れ出ることがなかったのに対して、建物や道路などしみ込まない材料で土地が覆われるようになると、降った雨は、すぐさま川へと流れ込むようになります。こうして、以前はなんでもなかった雨量でも、氾濫などの被害を起こす可能性が生じてくるようになったのです。また、近年増えた予想できない局地的な強い雨（ゲリラ豪雨）も、洪水の原因となっています。

産業や生活を通しての人々と川との関係が薄れ、さらに、流れがなくなり、汚れて魅力がなくなってくると、ますます人々の川への意識が遠ざかっていきます。人々は、川に平気でゴミを捨て、川を意識することなく建物が建ち、川に背を向けたまちができあがったのです。

以上に挙げたような今までのやり方に対する反省から、全国の多くのまちで川や水辺を再生し、まちづくりに生かす取組みが進められています。たとえば、舟運からまちづくりを見直す取組みは、新潟県つうせんがわの通船川や東京都の日本橋川などで行われています。

川は、密集市街地のなかでの貴重なゆとりの空間として見直されてきています。まずは私たち一人ひとりが、川の姿についてじっくり考え、再生に向けての行動を起こすことが必要でしょう。さらにこれから、川のもつ「環境調和」（たとえば、川が風の通り道になったり、河岸の樹木を含めてヒートアイランド現象を緩和することなど）や「リラクゼーション」、「防災空間」、「イベントなどの場」としての役割を活かし、まちづくりのなかに川を取り込んでいくことが重要です。